〔書　評〕

馬渕和夫著

『古代日本語の姿』

山口佳紀

著者馬渕は，言うまでもなく，斯学の指導的位置にあって，数々の名論文を世に送り出してきた学者である。その著者が近年，長年月に亘って書き継いだ諸論文を，分野別に3冊に分けて出版した。第1冊目は文学に関係するもので『古典の窓』(大修館書店)，第2冊目は語学に関わるもので『国語史叢考』(笠間書院)，第3冊目が古代語・上代語に関わるもので，本書『古代日本語の姿』(武蔵野書院)である。

本書は，体裁から言えば，縦書きの部分と横書きの部分とに別れるが，全体の構成を分かりやすくするために，章立てと論文名とをやや簡略化して紹介することにする。

《縦書きの部》

資料篇

稲荷山古墳出土鉄剣金象嵌銘の日本語表記史上の位置/隅田八幡宮蔵古鏡の銘文について/『日本霊異記』とその訓釈のかな/「有年申文」について

音韻篇

古代日本語成立の素描/万葉集の音韻/国語の「母音」/上代語の清濁に関するひとつの見解/ミマナと任那——古代日本語におけるmとn——/連声/O_1の問題/ヌとノ甲の問題

文法篇

動詞活用の起源/古代日本語の子音終止語幹/動詞の自他/日本語の形容詞・形容動詞/助動詞の起源/「る」と「す」

古代日本語と朝鮮語に関する諸問題

「くに」の語源/唐漢呉/「高天原」の故地/「阿羅斯等」について/「任那」について/『三国史記』『三国遺事』の地名について

《横書きの部》

『日本書紀』中の朝鮮資料をとおしてみた古代朝鮮語と古代日本語の音韻組織の対比について/『三国史記』『三国遺事』にあらわれた古代朝鮮の用字法について/『三国史記』記載の百済地名より見た古代百済語の考察(共著者＝洪思満・李寅泳・大橋康子)/『三国史記』記載の高句麗地名より見た古代高句麗語の考察(共著者＝李寅泳・大橋康子)/『三国史記』記載の新羅の地名・人名等より見た古代新羅語の考察(共著者＝李寅泳・辛容泰)

上記の一覧を見ても分かるように，内容は多岐に亘っており，また全体820頁に及ぶ

大冊であるから，この評文で本書の全貌を伝えることは，到底無理である。そこで，具体的に取り上げる論文の数を絞って紹介したいが，各章から論文を2本程度選んで，その内容を紹介し，私見を差し挟むことにする。

まず「資料篇」であるが，ここに並ぶのは，日本語史研究の上で重視されている文献について，その資料性を明らかにしようとした論である。たとえば，「稲荷山古墳出土鉄剣金象嵌銘の日本語表記史上の位置」は，稲荷山古墳出土鉄剣の銘文について，問題になる箇所を順次論じ，最終的に「この銘文は文体・用字とも古代朝鮮半島におけるものと大体一致するといえる」という結論を下している。

もっとも，この銘文に現れる音仮名の用字については，著者も参照している『稲荷山古墳出土鉄剣金象嵌銘概報』(埼玉県教育委員会編，1979年2月)に，「推古朝以降の金石文や魏志倭人伝以下の史書にみえる音仮名に部分的に一致するものもあるが，体系として一致するものとは認められない」のに対して，「日本書紀に引かれた古代朝鮮固有名（人名，地名，または日本語）等の表記に用いられた音仮名に極めてよく一致する」と指摘されているから，それをさらに詳しく述べたものということになる。

なお，この銘文は，まだ完全には解読されていないと思われる。

○辛亥年七月中記。乎獲居臣，上祖名意富比垝，其児多加利足尼，（中略）其児名乎獲居臣，世々為杖刀人首，奉事来至今。獲加多支鹵大王寺在斯鬼宮時，吾左治天下，令作此百練利刀，記吾奉事根源也。

通説では，大体上記のように文を区切って，

世々に杖刀人の首と為り，奉事し来たりて今に至る。獲加多支鹵大王の寺，斯鬼の宮に在る時，

と読んでおり，「寺」字を「寺，廷也」(説文解字)等によって，〈廷・官・館〉などの意と解しているが，著者はこれを疑問とする。その理由として，「寺」字を使うようになったのは仏教渡来以後のことで，それ以前に「寺」字が〈廷〉などの意で使われることは，国内でも朝鮮半島でもまず無いこと，また，〈大王の館が斯鬼にあった〉というのならばよいが，〈大王の館が斯鬼の宮にあった〉というのは，〈大王の館〉と〈斯鬼の宮〉とは同じもののはずであるからおかしいことを指摘する。通説的解釈が成り立ちにくいことは，著者の言うとおりであろう。

そこで，著者の提出した代案は，「寺」字は「壽」字の省画ではないかというのである。訳読文は示していないが，「獲加多支鹵大王壽(いのちながく)して斯鬼の宮に在る時」とでも読むらしい。しかし，ここで大王の長寿を述べるのは，文脈的にやや唐突ではあるまいか。

ところで，馬渕論文（1982年12月）以後に発表された宮崎市定『謎の七支刀』（中公新書，1983年9月）は，この「寺」字を「侍」字の省文と見るが，区切り方から見直して，

世々に杖刀人の首と為り，奉事し来たりて，今の獲加多支鹵大王に至る。寺(侍)して斯

鬼の宮に在る時，

と読み，〈乎獲居臣が獲加多支鹵大王に近侍して斯鬼の宮にいる時〉の意に解した。評者にはこの方が納得しやすいが，十分に解読されていないこの銘文の場合，著者のように，通説に安住することなく他の可能性を考えてみることは，是非とも必要なことである。

もう一つ，『有年申文』を扱った論考を取り上げたい。この文献は，初期草仮名の遺品として著名であるが，内容的にどんなことが書いてあるかという点は，この論文以前には余り検討されていなかった。草仮名を平仮名に直して示すと，以下のようになる。

○改姓人夾名勘録進上。これはなせむにか官にましたまはむ。見たまふはかりとなもおもふ。抑刑大史のたまひて，定以出賜，いとよからむ。　有年申

上記の「なせむにか(何)」の部分を，以前は〈どのようにしたらよいか〉の意に解したり，「か」字を脱して〈何とかして〉の意に解したりしていた。これに対して，著者は，この部分を〈これはどうして太政官に申し出されるのですか。お出しにならない方がよいのじゃないですか。〉の意であると解した。また，「見たまふはかりとなもおもふ」は，〈(官に出すのでなくて) あなたが御覧になるだけでよいと私は思います〉の意であるとした。さらに，「刑大史のたまひて」は，〈刑大史がおっしゃって〉の意ではなく，〈刑大史におっしゃって〉の意であると見た。

「改姓人夾名勘録進上」の部分を著者が「讃岐国司解」の「表題」と解したのは，誤りであろうが(参照：小松英雄『日本語書記史原論』302ページ)，この馬渕論文によって，『有年申文』の内容は従来に比べて格段に明らかになったと言ってよい。文献を言語史の資料として役立てるためには，その文献が何を言おうとしているかを明らかにすることが基本であり，その実践という意味で，注目すべき論文である。

次に「音韻篇」であるが，ここでは冒頭に「古代日本語成立の素描」が置かれ，音韻やアクセントの問題を中心に，この大問題が取り上げられている。その際，手がかりとなるのが，中央語と東国語との差異という問題である。著者は，最終的な仮説として，次のように考える。大和地方にいた原住民と，東国地方にいた原住民とは，全く別の人種であった。そして，大和地方の原住民は南方海洋民族で，しかもそれが数においても決して無視することが許されないほど優勢であった。それに対して，東国の原住民は，結局言語的に中央に圧倒される程度であって，それほど優勢な人口をもっていなかった。これに北方民族の言語がかぶさったのだが，上記の差が中央語と東国語との違いとなって現れた。以上が，馬渕説の大要である。

極めてスケールの大きい魅力的な仮説である。このような困難な問題が完全に解明されるということは，今後も望めないであろう。しかし，だからといって，こうした大事な問題を放置しておいてよいということにはならない。問題を解決するべく，可能な限りその徴証を求めて努力する必要がある。日本には，もともと基層となるべき言語があ

って，その上に新しく渡来した民族の言語がかぶさって来たという図式を描く説は，すでに種々見られる。著者は，そのような図式を具体的に描くための文献的な手がかりを残しているのが，上代東国語ではないかという見通しを立てるのである。

そこで，問題になるのが東国語の特徴である。たとえば，著者は「東国方言ではハ行転呼音が大和地方に先行してはじまっていた」と考える。その例として，養老五年(721)の下総国の戸籍に見える「孔王部」を挙げる。大野透『万葉仮名の研究』は，字書に「王，大也」とあるところから，「孔王」はアナオホ＞アナホという約音を利用した技巧的表記であると説明し，類例として地名ミホを「御大」（古事記）と表記した例をあげた。

これに対して，著者は，次のように言う。

> それにしても，「ホ」の音とまったく無関係に「王」の字があてられるものであろうか。「王」の字は，勿論「ワウ」の音であって，「ワ」のかなとしてもちいられていたから，当時下総国において，「ホ」の語頭の/ɸ/の両唇性がよわまり/u̯/の音にちかづいていたとすると，そこへこのましい字面をもち，かつ語頭に/u̯/をもつところの「王」の字をあてるということが比較的抵抗なくおこなわれる様になったのではないだろうか，という想像がなりたつ。とすれば，下総国において奈良時代のはじめから，語中のハ行音のワ行音に転ずる傾向が生じていたのではないか，ということになる。(75ページ)

評者から見ると，アナホベの表記に「孔王部」が当てられた理由としては，「王」字が「大」字と同じくオホの訓をもつこと，また「王」字が意味的に好字であることを指摘すれば十分であって，「王」字の字音まで考える必要があるとは思えない。

従って，ハ行転呼音が東国で先行したという著者の議論は，かなり強引な印象を受ける。ハ行転呼音の問題以外にも，さまざまな事例が指摘されているが，一々について，さらに厳密な検討が必要である。

この「音韻篇」では，音韻史上のさまざまな問題が取り上げられており，それぞれに有益で，学ぶところが多い。たとえば，「上代語の清濁に関するひとつの見解」は，従来，とかく表記の事実を無視してまで統一的に解決しようとしがちであった清濁の異例を，むしろ不統一のままで認めようとする論である。そして，指摘された実例の多くは，次に示すように，複合語の連濁に関わるものであるから，連濁形と非連濁形とあったということで納得できるものである。

○夜麻碁母礼流（記・歌謡30)/夜摩許莽例屢（紀・歌謡22）
○虚多智（紀・歌謡105)/己太知（万葉867)・許太知（万葉4026）
○飫斯毘羅枳（紀・歌謡96)/意斯比良伎（万葉802）

従って，基本的には著者のような考え方に賛同できる。ただし，次の例のように，連濁ということが考えにくい例では，別に何らかの説明が必要ではないか。

○旗芒（万葉2089)・波多須々支（出雲風土記)/皮為酢寸（万葉307)・波太須珠寸（万葉

1637)

この例について，大野透『万葉仮名の研究』(560ページ)が両者を別語であるとしたのに対して，著者は「いきすぎではないだろうか」と評している。しかし，著者のように，一語に濁音形・非濁音形の両語形があったと言うだけでは，釈然としないものが残る。

次に，「文法篇」に移る。最初に展開されているのは，「動詞活用の起源」の論である。これを考える前提として，次の二つの仮説を立てる。

1　日本語にはかつて母音調和があり，古代日本語動詞の語幹には，いまだ陽性母音と陰性母音の二種があったこと。

2　語幹には子音終止と母音終止とあったこと。

その仮説のもとで考えると，次のようなことが言えるという（275ページ)。

(1)　陽性母音語幹で子音終止は四段活用であること。

(2)　陽性母音語幹で母音終止は下二段活用であること。(ここは原文では「陰性母音語幹」となっているが，「陽性」でないと論旨が通らない。)

(3)　陰性母音語幹で母音終止は上二段活用であること。

(4)　中性母音 i1 をもつ一音節語は上一段活用であること。

語幹母音の性質によって活用の種類が分かれるという考え方は，興味深い。また，語幹に母音終止と子音終止とあったという考え方を採る論者は，少なくない。ただ，ここで不思議に思えるのは，上記の(1)に対応する項目として，「陰性母音語幹で子音終止」の類をなぜ認めないのかという点である。ここで陰性母音と呼ばれているのは o2(＝オ列乙類母音）のことであるが，四段活用動詞の語幹母音が o2 であるものは，決して少なくない。現に著者の作った「二音節動詞における母音と活用の種類の関係」(259ページ)では，

語幹母音が o2 のもの　四段 16/下二段 5/上二段 7

となっている。従って，馬渕説で考えるとして，「陰性母音語幹で子音終止」という類も，当然認めるべきではないか。

ところで，ここで「語幹」と言われているものが現実の語から抽象された形態を指すならば，子音終止ということがあっても，特に困らない。しかし，かつて現実の語として子音終止で独立できる形態があったという意味ならば，新たな問題が生ずる。すなわち，我々の知る日本語では，名詞などもすべて母音で終止しているが，それらについても，かつて子音終止の形態があったことの痕跡は存するのか，という疑問である。

次に，「日本語の形容詞・形容動詞」の論を取り上げたい。これは，特に形容詞について，それが物事の属性を表す形状言に各種の接尾辞が付くことによって成立したものであることを論じたものである。この点は，大きく見て異論のないところであろう。問題は，その接尾辞がどのような起源をもつかという点である。

たとえば，連体形語尾のキであるが，著者はこれを過去の助動詞の終止形であるキと起源的に同じものと見る。すなわち，キ（甲）という独立の形態素があって，「過去」の意を表していたものと仮定し，それが助動詞的に使用されれば過去の意を表し，時間のない形容詞に付いた場合には，そうなった状態を表す連体形語尾になったのだと解するのである。意味的には考えられる経路かも知れないが，一方が終止的に，他方が連体的に使われるという差に関しては，説明がない。

ところで著者は，このキを動詞ク（来）の連用形キ（来）とも同じものと説明している。動詞キ（来）が連用形であるのに対して，助動詞キが終止形であることについては，別の箇所で「i 母音のついた露出形が終止の意も表わしていた時代の用法の残存と解される」（355 ページ）と述べている。だとすれば，形容詞語尾キが連体的であることは，どのように説明できるのだろうか。

また著者は，シク活用形容詞の語幹末に現れるシや，終止形語尾に現れるシについて，代名詞のシ（其），強意の助詞のシ，さらには過去の助動詞キの連体形のシと同源と説くのだが，このような考え方が認められるためには，機能面・意味面からさらに多くの議論が必要であろう。

《縦書きの部》の最後は，「古代日本語と朝鮮語に関する諸問題」である。最初の「「くに」の語源」という論文は，地域区分の語の多くは古代朝鮮語から来たのであろうという見通しのもとに，「くに」という語もその一つで，古代朝鮮で使われていた漢語「郡」に由来することを考証したものである。クニと「郡」との関係を指摘した論はすでにあるが，他の地域区分語コホリ・ムラ・マチ・サトなどと一緒に考えることによって，問題をより包括的に捉えようとするところに，馬渕論文の狙いがある。なお，地名イハレを「磐余・石村」（万葉集）と表記した例に関連して，

> なぜ「アレ」のよみが，「村」「余」の字にあるのかとなると，未詳というよりしようがない。（401 ページ）

と記すが，「余」字については，〈我〉の意でアレという語が存在したことによると見て，問題はないのではないか。

次の論文である「唐漢呉」は，それぞれをカラ・アヤ・クレと読む理由を考え，語源を古代朝鮮語に求めたものである。簡略に言えば，カラは韓族が自らをカラ（加羅）と呼んだところから来たもの，アヤは古代朝鮮の地名「安羅」に由来するもの，クレは「高句麗」から美称「高」を省いた「句麗」から出たものとするのである。このような場合，カラ・アヤ・クレを別々に捉えれば，さまざまな可能性が考えられるであろう。亀井孝「しあわせあしき“シナ”のために」（文学〈季刊〉2 巻 1 号，1991 年 1 月）は，カラ（韓・唐）の語源を〈海彼〉の意で「彼（か）ら」（＝かのあたり）と呼んだものと見るが，なかなか説得力のある説である。しかし，外国を表す古代日本語の単語をグループとして考える馬

渕説は，それとはまた違った魅力をもつ。

以上が《縦書きの部》で，残りは《横書きの部》であるが，内容的には「古代日本語と朝鮮語に関する諸問題」に連続する。すなわち，『日本書紀』および『三国史記』『三国遺事』に現れた古代朝鮮の固有名詞（地名・人名等）の漢字表記をもとに，古代朝鮮語の音韻組織，および古代朝鮮語と古代日本語との関係を考えようとしたものである。

「『日本書紀』中の朝鮮資料をとおしてみた古代朝鮮語と古代日本語の音韻組織の対比について」を見ると，ここで行われた音韻組織の再構の過程には，部分的に分かりにくい箇所があって，理解を妨げている。たとえば，百済の地名表記に用いられた漢字を上古音に基づいて整理し，頭子音と中心母音とによって縦横に配列している（740ページ）。ところが，母音列を見ると，[•â] [kâ] [kap] [sa] [pwân] [mwa] [mwân] [mwâg] 等が一列に並ぶ一方，[kiag] [tsiag] 等の列にも [pwâg] [mwâg] が出て来る。特に [mwâg] が両方の列に出て来るのは，不審である。単なるミスでないなら，何らかの説明が必要であろう。

さて，冒頭の簡略目次に示した如く，『三国史記』に記載された百済・高句麗・新羅の地名等を扱った連作は，馬渕を中心とする共同研究の成果である。この中で，特に興味深いのは，古代日本語と最も密接な関係をもっていたのは，百済語であった可能性が指摘されている点である。従来，高句麗語との関係を指摘した論は多いが，もし百済語との強い関係が指摘できれば，古代日本語の位置づけを考える際の視野が大きく変わることになろう。ただ，その研究は現在進行中の由（678ページ）であるから，成果の発表を期待することにしたい。

以上，本書の内容に触れつつ，それに対する私見を述べた。やや批判的な言辞が多くなったが，それは本書が，問題を小さく限って確実な論を構築しようとするのでなく，解決困難な問題に対して大きな見通しを立てる，という野心的な内容をもつからである。我々後進は，著者の思考の成果を学ぶだけでなく，その意欲的な姿勢をも見習うべきであろう。その意味で，本書がより多くの人に読まれることを希望するものである。

（1999年1月30日発行　武蔵野書院刊　A5判　820ページ　本体価格22,000円）

——聖心女子大学教授——

（2001年9月6日　受理）